

# 第4回 雪明・新潟眼科フォーラム

(日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業No.25182)

Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum

日時:平成29年2月19日(日) 9:00~15:00

場所:「朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター」2階

スノーホール

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400

専門医単位:3単位

会費:医師:3,000円

レジデント・視能訓練士:1,000円

※視能訓練士の方は、事務局へ事前登録をお願いいたします。

※託児室を設置します。ご希望の方は事前予約が必要です。事務局へお問い合わせ下さい。

## プログラム

Program

9:00~ 開会の挨拶 新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授 福地 健郎先生

【第一部】 座長:新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 長谷部 日先生

9:05~9:50 <<1>神経眼科・小児眼科>>

### 『弱視治療のアップデート』

浜松医科大学眼科 病院教授 佐藤 美保先生

9:50~10:35 <<2>網膜硝子体>>

### 『硝子体手術のアップデート』

横浜市立大学大学院医学研究科視覚再生外科学 教授 門之園 一明先生

10:35~10:45 (休憩)

座長:新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授 福地 健郎先生

10:45~11:30 <<3>緑内障>>

### 『緑内障診療の質を向上するために』

東北大学大学院医学系研究科神経感覚器病態学講座眼科学分野 教授 中澤 徹先生

11:30~12:15 <<4>腫瘍・形成>>

### 『眼腫瘍に対する外科的治療の実際』

東京医科大学臨床医学系眼科学分野 主任教授 後藤 浩先生

12:15~13:30 (昼食休憩) ※会場にて昼食をご用意いたしております。

【第二部】 座長:新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 松田 英伸先生

13:30~14:15 <<5>アレルギー>>

### 『アレルギー性結膜疾患の基礎と臨床』

順天堂大学医学部附属浦安病院眼科 教授 海老原 伸行先生

14:15~15:00 <<6>角膜>>

### 『この濁りはなんだろう? 角膜混濁の見方と対処法』

東京大学大学院医学系研究科外科学専攻眼科学 准教授 白井 智彦先生

15:00~ 閉会の挨拶 新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 長谷部 日先生

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

# 第4回 雪明・新潟眼科フォーラム

Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum

日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業 No.25182



開催日時

平成29年 2月19日(日) 9:00~15:00

開催場所

「朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター」2階 スノーホール

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400

事務局

新潟大学大学院医歯学総合研究科 視覚病態学分野 事務局内

雪明・新潟眼科フォーラム事務局 TEL:025-227-2296 FAX:025-227-0785

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

## 第4回 雪明・新潟眼科フォーラム



## ごあいさつ

新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授

福地 健郎



謹啓

厳寒の候、先生方におかれましてはいよいよ御清祥のこととお慶び申し上げます。

2014年2月に第1回が行われた雪明・新潟眼科フォーラムも、今回で第4回を数えることになりました。新潟県眼科の医療レベル、新潟大学眼科の研究レベルの底上げを目的に始めたこの講演会も、すでに新潟県眼科の最大のイベントとして定着したように思われます。1日で眼科の様々な領域に関連した講演を拝聴できるということだけではなく、視能訓練士他の眼科医療に関わる方々とその場を共有できるという意味でも貴重な機会を提供することができているように思います。今回も各領域の第一線の、まさにベテランと言って良い先生方にお集まりいただくことができました。これまでのこの会での講演では、いつも驚きと感動の連続でした。私自身、この会が待ち遠しい限りです。

皆様、ご多忙とは存じますが、是非とも出席賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

謹白



## 弱視治療のアップデート

浜松医科大学眼科学教室 病院教授 佐藤 美保 先生

略歴

1986年	名古屋大学医学部卒業	2002年7月	浜松医科大学医学部眼科学 助教授
1993年	名古屋大学眼科学 助手	2011年1月	浜松医科大学眼科病院 教授
1993年9月-1995年3月	米国Indiana大学小児眼科斜視部門留学	現在に至る	
1997年7月	名古屋大学眼科学 講師		

弱視の診断と治療については、ここ数年の間に、米国を中心として多施設共同研究が急速に進んだ。その結果、健眼遮閉の時間が終日遮閉でなくても、最短一日2時間の遮蔽でも効果があること、健眼遮閉とアトロピンペナリゼーションが最終視力に差がないこと、アトロピン点眼は毎日ではなく、週末だけでも効果がでないこと、遮閉訓練をしなくても、眼鏡をかけるだけで視力が改善するものがあることなどがあきらかにされた。

このような、結果はこれまでの治療を支持する部分もあるが、そうでない部分もあり、実際の臨床の場面でどこまで研究結果をうけいれていくかについては、まだまだ議論がある。

多くの無作為前向き多施設共同研究では、研究のプロトコルを決定して、多くの研究者が一斉に同じプロトコルでデータを収集する。そのためにプロトコルの決め方が最も重要なポイントとなり、プロトコルに間違いがあると誤った結論に達することもある。エビデンスの高い研究結果であればあるほど、医療現場に与える影響は高いと周知されるとその訂正は困難である。

さまざまな情報が流れている現代で、どのように情報を整理して日常診療に生かしていくかについて解説したい。



## 硝子体手術のアップデート

横浜市立大学視覚再生外科学 教授 門之園 一明 先生

略歴

1988年	横浜市立大学医学部卒業	2007年	横浜市立大学附属市民総合医療センター眼科 教授
1999年	横浜市立大学医学部眼科 講師	2014年	横浜市立大学視覚再生外科学 教授
2005年	横浜市立大学附属市民総合医療センター眼科 准教授	現在に至る	

近年の硝子体手術の進歩と普及は目覚ましく、年間約20万件(2014)の手術が本邦で行われている。その硝子体手術の殆どはMIVS;小切開硝子体手術である。本手術システムでは、術後の早期視力回復が得られ、一般術式として定着している。さらに、いくつかのあたらしい手術術式や手術システムが開発されこの分野の変化は著しい。本講演では、現在の一般的な硝子体手術の適応と成績、そして注目されている内境界膜移植術、黄斑下血腫移動術、血管内治療およびdigitally-assisted vitreoretinal surgeryについて、その概要に触れてみたい。



## 緑内障診療の質を向上するために

東北大学大学院医学系研究科神経感覚器病態学講座眼科学分野 教授 中澤 徹 先生

略歴

平成 7年3月	東北大学医学部卒業	平成15年4月	東北大学医学部附属病院 助手
平成 7年4月	東北大学医学部附属病院 研修医	平成15年9月	米国マサチューセッツ眼耳病院 リサーチレジデント
平成 8年4月	山形市立病院 済生館 研修医	平成18年9月	東北大学医学部附属病院 助手
平成10年4月	東北大学大学院医学系研究科外科学専攻眼科学分野入学	平成19年6月	東北大学病院 講師
平成14年3月	東北大学大学院医学系研究科外科学専攻眼科学分野卒業	平成21年4月	東北大学大学院 視覚先端医療学寄付講座 准教授
平成14年4月	公立川田病院 眼科長	平成23年9月	東北大学大学院 神経感覚器病態学講座 眼科学分野 教授

緑内障による視神経障害は不可逆性であり、失った視機能を改善させることは困難である。また、緑内障有病率は高齢者に高く、今後2030年をピークに高齢者人口の増加が予測されることから、今まで以上に生涯にわたっての視覚の質を維持するための適切な診療が重要になると考えられる。しかし、緑内障は自覚症状が弱いため病院来院時には既に視野障害が進行している症例、手術紹介のタイミングが遅くなった症例、手術により持続的な眼圧下降が得られない症例、十分眼圧が低いにも関わらず視野が進行する症例など、診療において直面する問題点は多数ある。

現在、我々ができることは、早期診断を適切に行い、治療においては眼圧下降の達成のみにとらわれず、緑内障性進行を正確に見極めることである。近年、ステレオ眼底写真、光干渉断層計、レーザースペックルフローグラフィなど他覚的な検査の目覚ましい発展により、緑内障診断の手段が充実してきた。それぞれの検査方法には一長一短があり、検査結果を機能と構造の関係を照らし合わせながら、緑内障診断、経過観察に生かしていくべきである。そこで、本講演では、緑内障診療の質を向上するために、緑内障検査機器の具体的な応用法に関して最近の知見をまとめ紹介する。

## 眼腫瘍に対する外科的治療の実際

東京医科大学眼科 主任教授 後藤 浩 先生

略歴

1984年	東京医科大学 卒業	2002年	東京医科大学眼科 助教授
1988年	南カルフォルニア大学Doheny眼研究所	2006年	東京医科大学眼科 教授
1993年	東京医科大学眼科 講師	2007年	東京医科大学眼科 主任教授

白内障、緑内障、網膜剥離などの一般的な眼疾患に対する外科的治療は日頃から経験することも多く、耳学問としてもそれなりに新しい情報を得る機会はあると思います。しかし、眼腫瘍については多くの眼科医にとって‘他人事’となってしまいがちとかがえられます。

実際、それほど多くの需要があるわけではありませんが、疾患によっては増加傾向にある眼腫瘍もあります。良性腫瘍の場合は治療までに時間的余裕のあることがほとんどですが、悪性腫瘍では眼病変を契機に不幸な転機を迎えることもあり、治療はもちろんのこと、早期診断に関わる最前線の眼科医の役割は重要です。

講演では代表的な眼腫瘍の外科的治療の実際を、パターン別に供覧させていただきます。皆様の明日からの診療にはきっと役に立たないお話となりますが、眼腫瘍の臨床の現状を知っていただけたら幸いです。



## アレルギー性結膜疾患の基礎と臨床

順天堂大学医学部附属浦安病院眼科 教授 海老原 伸行 先生

略歴

1989年	順天堂大学医学部 卒業、臨床研修医	2006年	順天堂大学医学部 眼科 助教授
1993年	順天堂大学医学部 眼科 助手	2012年	順天堂大学医学部附属浦安病院 眼科 教授
1995年	順天堂大学医学部 免疫学教室 研究員		
1997年	順天堂大学 アトピー疾患研究センター 眼科部門研究員		
2004年	順天堂大学医学部 大学院医学研究科 講師(眼科学)		日本アレルギー学会代議員、日本眼炎症学会評議員、日本眼科アレルギー研究会副理事長

花粉性結膜炎は国民の約1/3が罹患する疾患であり、著しく生活の質を低下させる。治療は抗アレルギー点眼液が主になるが、患者の満足度は決して高くない。春季カタルは免疫抑制薬点眼液の登場により眼圧上昇なしに効果的に治療できるようになったが、治療に抵抗する症例、再発を繰り返す症例もある。アトピー性角結膜炎は、慢性期には結膜の線維化・杯細胞の消失を認め、抗炎症治療のみでは症状・所見を改善させることは出来ない。以上のようなアレルギー性結膜疾患をめぐるまだ解決できていない問題について、新たな基礎的・臨床的知見より解決を探ってみたい。

## この濁りはなんだろう？ 角膜混濁の見方と対処法

東京大学医学部付属病院眼科 准教授 白井 智彦 先生

略歴

1995年	東京医科大学卒業	2008年	東京大学医学部付属病院眼科 特任講師
1997年	東京大学医学系研究科外科学専攻(眼科)	2011年	東京大学医学部付属病院眼科 専任講師
2000年	米国ハーバード大学 研究員	2016年	東京大学医学部付属病院眼科 准教授(角膜移植部部長)
2002年	東京大学医学部付属病院眼科 助手		

角膜はいわゆる無血管透明組織である。この角膜の透明性は角膜実質のコラーゲンの太さや間隔が格子状に一定に配列していることにより成立する。この実質の構造を守るために、様々な透明性維持機構が角膜には備わっている。しかしこれらのメカニズムが破壊されると角膜は透明性を失い、いわゆる角膜混濁となる。角膜混濁には主に浮腫性混濁、沈着性混濁、炎症性混濁に大別され、さらに炎症性混濁には浸潤性と瘢痕性に分別される。本講演では角膜の透明性維持機構を元に、角膜混濁を来す様々な疾患の考え方、治療法、さらに現在我々がやっている基礎研究についても話す予定である。